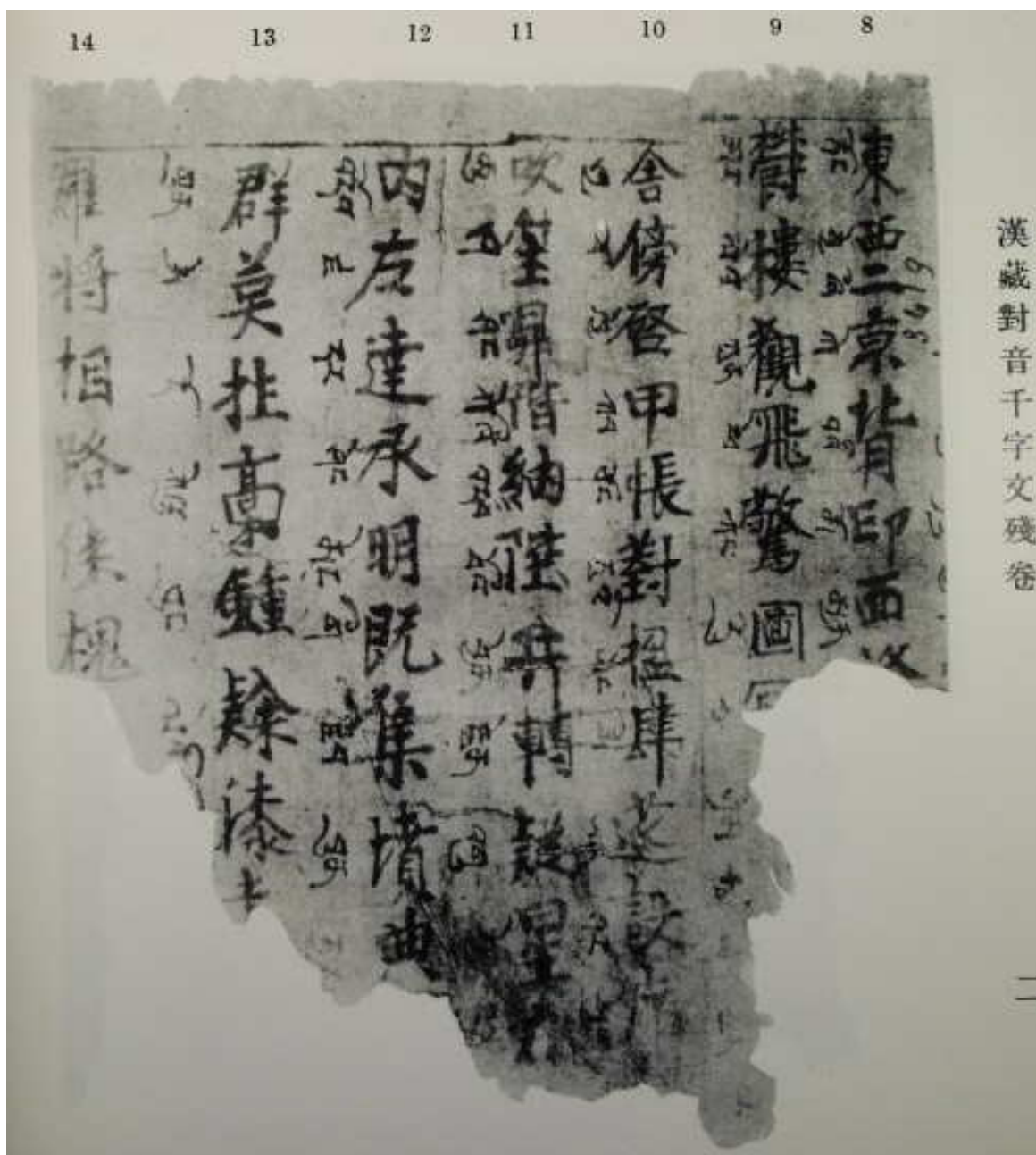


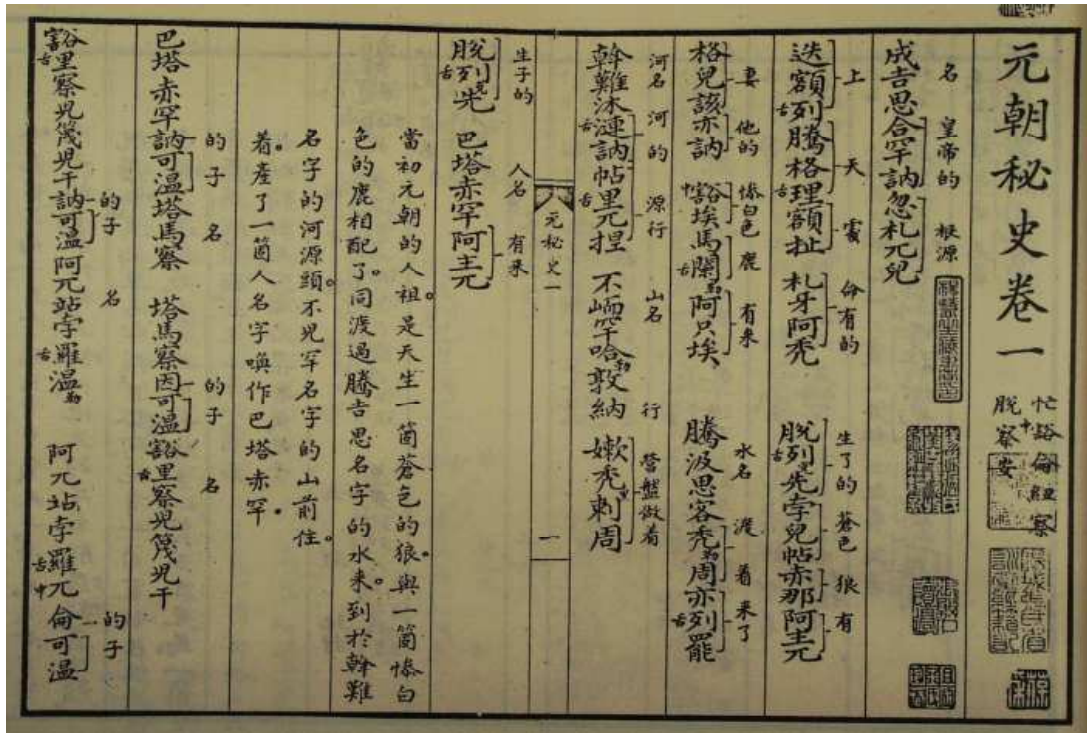
対音資料とは？

ある言語を表記する文字（表意文字であろうと表音文字であろうと）を表音的に用いて他の言語を表記する時、それを対音資料と呼ぶことができる。対音資料には様々なタイプがある。

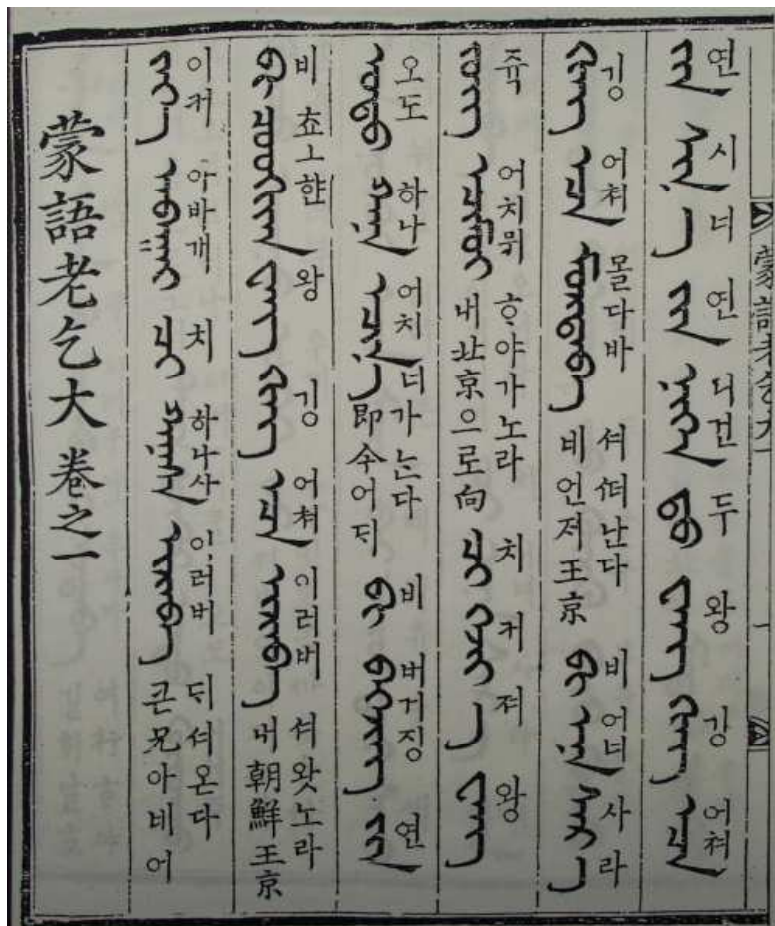
a) 表意文字に対して、振り仮名のように表音文字が付されたもの。下はその一例で、個々の漢字にチベット文字で漢字音が記された敦煌出土「千字文残卷」。(羅常培『唐五代西北方音』中央研究院歴史語言研究所(台北)1991[もと上海1933]より)



b) 表意文字が表音的に用いられたもの。下の例は14世紀末に漢字でモンゴル語を記した『元朝秘史』。(『元朝秘史三種』 中文出版社(京都) 1975より)

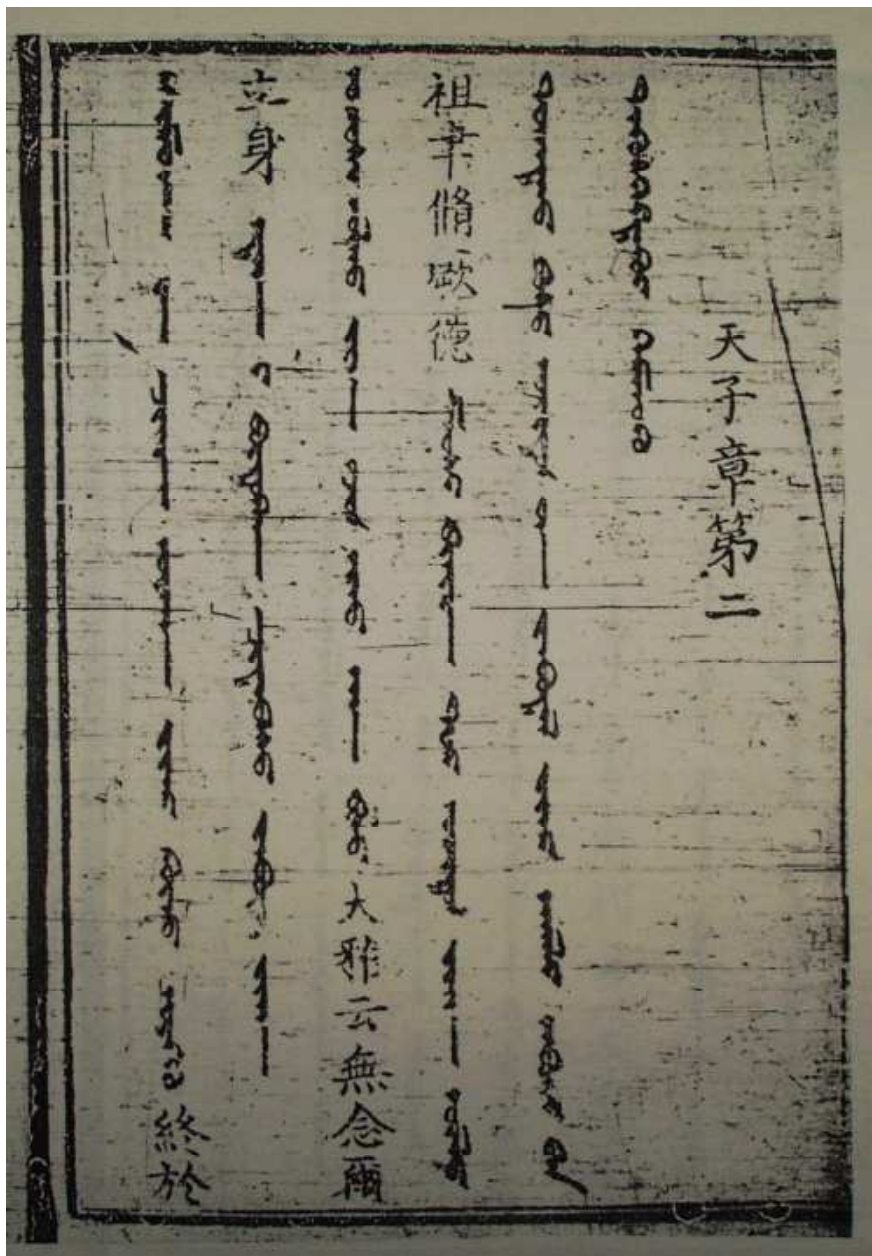


c) 表音文字によって他言語を表記したもの。次の例は清代モンゴル語にハングル文字で“振り仮名”をつけたもの。すなわちハングル文字モンゴル語の例。(『蒙語老乞大』 西江大学校人文科学研究所(ソウル)1983より)



なお、(c)には、このような振り仮名タイプのほかに、単独で記されたもの（つまり表音文字で他言語を記しただけのもの）があり、解読に相当の努力を要することがある。明末の宣教師資料「賓主問答私擬」は、当時の漢語口語をローマ字で記した資料であり、古屋昭弘氏の精緻な研究によってかなりの部分が解読されたが、若干部分は未解読のままである（cf. 「明代官話の一資料—リッチ・ルッジェーリの「賓主問答私擬」『東洋学報』第70巻第3・4号、1989）。また、パリの国立図書館所蔵の清代写本の中に、満洲文字で『三国志演義』を表記した資料があるが、漢語の発音を表記しているものの、対応する漢字は記されておらず、現存のどのテキストとも完全には一致しないため、これも一定の解読作業を要する。

d) 対訳資料の中に含まれる対音部分。例えば、下に示した14世紀の蒙漢対訳『孝経』はウイグル文字モンゴル語と漢語という二つの異なる言語が表記されているから、対訳資料であって、対音資料ではないように見えるが、実際にはモンゴル語文中に漢語語彙を表記した部分があり、その部分は漢語に関する対音資料と言って差し支えないのである。（道布『回鶻式蒙古語文献匯編』民族出版社（北京）1983より第1章末尾部分）



この(d)タイプの資料はしばしば文字(および言語)の解読に寄与する。有名なヒエログリフ(聖刻文字)の解読は、まずカルトゥーシュと呼ばれる楕円の中に記されたエジプトの王名からなされた。ヤングやシャンポリオンがこの部分を表音的な表記でありギリシア語との対音資料たり得ると見抜いたことが最大の契機であったと言ってよい。また、楔形文字ペルシャ語の解読も、同様に王名から始まった。固有名詞は表音的に表記される(つまり対音資料である)可能性が高いということに、グローテフェントやローリンソンが気づいた時、解読は正しい方向に進んだのである。現在まだ解読には至っていない契丹文字による契丹語は、対音部分のみはかなりの程度解読が進んでいる。碑文に記された契丹語の中に相当数の漢語語彙が含まれており、その部分はおおむね読めるようになっている。

以上のほかに、対音資料に準ずるものとして、日本語・朝鮮語・ベトナム語などの中にも含まれる漢語語彙も類似の性格を有している。これらは漢語音韻史(特に中古音)の研究にとって重要な役割を果たした。ただし現代日本語や現代朝鮮語などの漢字音を唐代の漢語音などに直結させるのは、正当な方法論とは言えず、あくまでも中古音の輪郭をつかむ便宜上の措置と心得るべきである。実際には古写本など真に対音資料と称すべき資料を用いるのが順当な手続きである。そのような手続きの好例に有坂秀世「メイ(明)メイ(寧)の類は果たして漢音ならざるか」(もと1940年、『国語音韻史の研究 増補新版』三省堂1957、所収)がある。

豊富な対音資料を持っている言語は第一に漢語であり、第二にモンゴル語である。この二つの言語はともに10種類前後の文字によって表記された歴史を有している。時代を14世紀に限定してみても、漢語を記した資料には、

1. 漢字
2. パспа文字(各種碑文や『蒙古字韻』、『事林広記』所収「百家姓」、貨幣などのほか、モンゴル語文中の漢語表記も対象になる)
3. ペルシャ文字(ペルシャ語訳『脈訣』中の漢語表記)
4. ウイグル文字(ウイグル語文およびモンゴル語文中の漢語表記)

などがあり、モンゴル語も、

1. ウイグル文字(各種碑文、書簡、蒙漢対訳『孝経』、貨幣など)
2. パспа文字(各種碑文、聖旨写本、牌子など)
3. 漢字(『事林広記』所収「蒙古訳語(至元訳語とも)」、『元朝秘史』、甲種『華夷訳語』など)
4. アラビア文字(アラビア語モンゴル語辞書『ムカディマツト・アル・アダブ』など)

などがある。

なお、対音資料は常に双方向的な性格を持っている。例えば、漢字にハングルで音注を施した資料(上述aのタイプ)は、漢語の音声を考える資料になると同時に、朝鮮語の音声を探る資料でもあり得る。同様に、漢字でモンゴル語を記した資料(上述bのタイプ)は、漢語とモンゴル語の双方の資料になるわけである。このような対音資料の性格を意識しておくことは、各言語の音韻史を考える上で非常に重要である。同じ文字で同じ言語を表記した二つの資料が表記法を異にしている場合、それがいずれの言語の問題であるのか、正しく見極めねばならない。以下に二つだけ例を挙げておく。

<ハングル文字漢語>: 16世紀の『翻訳老乞大』では漢字「家」に対するハングル表記は「gia」であるが、18世紀の『朴通事新訳諺解』では「jia」となっている。これは漢語の側の問題で、「家」

が/kia/ > /tɕia/ という舌面音化を経た結果を反映していると考えられる。

<漢字音訳モンゴル語> : 14世紀前半の『事林広記』所収「至元訳語」では漢字「可」でモンゴル語/ke/を表しているが、14世紀後半の『元朝秘史』では「可」でモンゴル語/kö/を表している。これはモンゴル語の問題ではなく、漢字音訳を施す際の漢語の問題である。つまり、前者の場合には「可」を/k‘ə/と発音する漢語に基づいたもので、後者の場合には「可」を/k‘o/と発音する漢語に基づいたものと想定することができる。

以上、対音資料についてあらましを述べた。例が東アジアの言語と文字に偏っているのは、この地域の資料が群を抜いて豊富であることによる。しかし、他の地域の対音資料も重要であることは無論であり、とりわけ現在世界中で研究が進められているカローシュティー文字資料など西北インドから中国西域にかけての資料は今後興味深い研究対象となる可能性を秘めている。

この項目は中村雅之が担当しました。(2006. 1. 28)